江戸時代の四日市代官所跡（約410～150年前）

現在の市内中心部は、享保9（1724）年～享和元（1801）年の大和郡山藩（今の奈良県）の領地だった時期を除くと、江戸時代を通じて天領（幕府領）でした。四日市代官所は幕府領支配の拠点で、市内北町の中部西小学校の場所にありました。なお、代官所の建物は明治時代になると三重県庁等として使われていましたが、明治9（1876）年にすべて焼失しました。

明治時代に描かれた代官所の絵 水谷百碩画
四日市市立博物館蔵

表紙の解説

北小松町にあった北小松古墳群3号墳（6世紀）の石室から発見されたコハク玉です。1976（昭和51）年に発掘されました。

保存処理後のコハク玉

素材のコハクは樹脂が固まって形成された化石ですので、大変もろいために崩壊していましたが、令和3年度に保存処理を行い、元の卵型の形へと復元しました。その際、粉々に割れていた破片を用いて、科学分析※を行ったところ、コハクの産地は東北地方の岩手県久慈市あるいは福島県いわき市と分かりました。

北小松古墳群3号墳

※（公財）元興寺文化財研究所調査

磁器 紅皿

江戸時代には、化粧品の口紅は紅花を原料とし、皿の内側に塗られて紅屋で売られていました。この皿の外側には「本家小町紅京都〇〇」と書かれています。京都にあった紅屋の「小町紅」は絶世の美女と言われた小野小町にあやかった商品でした。なお、紅は貴重な高級品でしたので、割れたところを漆で修復する焼継ぎをしてまで使っています。

コラム なぜこんな形なの？

江田川遺跡から出土した耳皿

江田川遺跡から発見された平安時代（約1000年前）の箸置きです。穴の中からこの土器一点だけが発見されました。平安時代の箸置きは、これまでも四日市市内では須恵器を焼いていた岡山古窯跡の登り窯から発見されていましたが、実際に使用していた消費地の遺跡で発見されたのは初めてです。つまり、箸置きを使える人はごく少数の限られた人だったことがわかります。今でも、伊勢神宮ではよく似た形の箸置きがお供え用に使われています。

耳皿の使い方（例）

第25回 発掘展 ～子どものための考古学～
◆会期　令和4年7月27日（水）～8月21日（日）
◆場所　四日市市立図書館　2階展示コーナー
◆編集　四日市市シティプロモーション部文化課
◆発行　四日市市　令和4年7月27日

第25回 発掘展

～子どものための考古学～

令和4年7月27日（水）
～8月21日（日）
午前9時30分～午後5時
月曜日・第2火曜日休館

見どころ説明
8月3日（水）
10:00～12:00
（当日、自由参加
先着6名程度）
小学6年生以上対象

四日市市立図書館　2階展示コーナー

弥生時代の久留倍遺跡（約2000年前）

大矢知町で見つかった久留倍遺跡からは、弥生時代（約2000年前）にあったムラも見つかっています。久留倍遺跡では、弥生時代の人びとが生活に使っていた道具類が数多く見つかっています。

弥生時代の久留倍遺跡の想像図

弥生土器　壺

貯蔵に用いられた土器です。壺の表面は、模様をつけて飾られています。

弥生土器　甕

土器の下半分は、まっ黒に煤けています。土器の中にお米などを入れて、煮炊きに使ったためです。

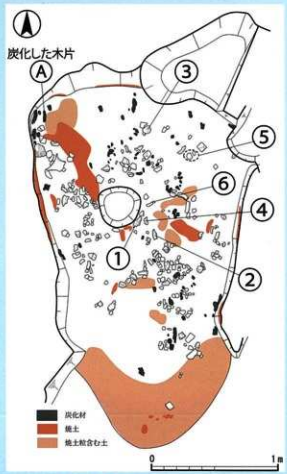
弥生土器　高坏

食べ物の盛り付けに用いられた土器です。

炭化した木片

土師器を焼く際に燃料となった薪の一部が炭化して残っていました。顕微鏡で観察した結果、薪に使われた木材はブナ科シイ属（ドングリの一種）と分かりました。

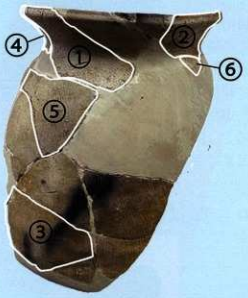
炭化した木片Ⓐの顕微鏡写真



土師器焼成坑の平面図

飛鳥時代の江田川遺跡（約1400～1350年前）

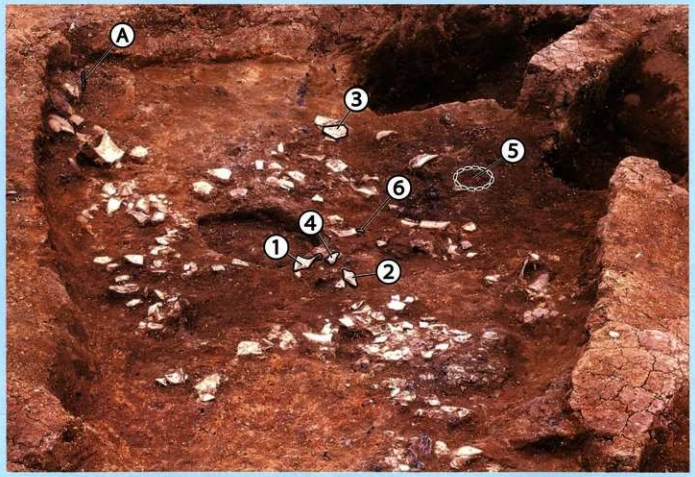
西坂部町の江田川遺跡で令和元年に行った発掘調査では、飛鳥時代の土師器焼成坑が発見されました。土師器焼成坑とは、土師器を焼いた窯跡のことです。長さ3.0m、幅1.8mの二等辺三角形の形状をし、深さは30㎝ほどが残っていました。壁面が真っ赤に強く焼けており、細かく割れた土師器片や焼けた土と炭化した木片が多量に含まれていたことから、土師器を焼いていたことが分かったものです。



土師器　甕

下の写真のように、細かく割れて発見された破片をパズルのように組み立ててみると、左の写真のように、甕の形になりました。

おそらく、焼いている時に割れてしまったために製品として出荷されなかったのでしょう。



土師器焼成坑から土器や炭化材が発見された様子（南から）